

# 1年次コミュニケーション重視の英語学習と 学生の意識

——愛知淑徳大学現代社会学部英語学習に関する調査報告——

石橋千鶴子

## 1. はじめに

愛知淑徳大学の現代社会学部は、設立後3年目に入り、授業内容の充実をはかるためカリキュラムの改善を検討する時期になってきた。英語科目についても、現在のカリキュラムの有用性を考え、改善すべき点はその方法を検討しなければならない。本学部の英語教育においては、コミュニケーション能力の育成ということが目標として掲げられ、専門知識を身につけていくための基礎という位置付けがされている。この英語カリキュラムの基礎的プログラムとなっているのは、1年次必修科目「英語コミュニケーション1～4」（授業は前後期週2時間、計8単位）である。これらは全て、ネイティブの教師が担当する。2年次からは選択科目が用意されており、卒業までに必修および選択科目で最低計12単位が必要になっている。入学試験において英語が必須科目ではないため、入学者の英語学力や学習意欲には、かなりのばらつきがあると思われる。そのような状況での学習効果を考慮した結果、本学部設立の2年目より、1年次英語科目において到達度別クラス分けを実施することになり、現在に至っている。

大学の英語教育にふさわしい授業内容を保ちながら、実際に役立つコミュニケーション能力を育成するという目標は、現在の英語カリキュラムでどの程度達成できるのだろうか。そしてその英語運用能力は、専門知識を身につけていくために十分な道具となりうるのだろうか。それを知るためには、すべての英語科目が出そろうまで待たなくてはならないだろう。しかし、カリキュラム改善の検討を始めるために、これまでの教育方法の有効性および問題点を調べ、あわせて学生の関心、ニーズ、学習意欲などについての現状を把握する必要があると思われる。

そこで、1997年4月、2年生対象の選択科目「英語コミュニケーション5」（計6クラス）の学生を対象に、4月初めの授業時にアンケート調査を行った。調査の目的は、英語カリキュラムの基礎となっている1年次英語学習の現状を把握し、同時に英語教育に対する学生の意識を知り、今後の英語教育改善のために役立てることである。アンケート前半では、1年次の英語学習について、そして後半では本学部での英語教育に対する要望などについて学生の意見を求めるものであった。欠席者、遅刻者を除き、計194名（2年生総数320名の約61%）から回答が得られた。本稿では、その調査結果について論じる。

## 2. アンケート調査の結果と考察

### 2. 1 1年次コミュニケーション重視の英語学習：その有用性と成果について

まず、調査対象の学生達の英語学習に関する背景を調べた。

設問 I. 高校時代、あなたは英語学習が好きでしたか。 (表 1)

a) 好きだった (「グループ1」とする。)	36/194 (約19%)
b) まあまあだった (「グループ2」とする。)	65/194 (約33%)
c) きらいだった (「グループ3」とする。)	93/194 (約48%)

表1から、「英語コミュニケーション5」を履修している2年生194人中約48%の者が高校で英語嫌いであったということが明らかになった。英語の学力や学習意欲において、個人差が大きいことがうかがえる。

高校の英語教育では、文法知識、語い、読解力の強化が重視され、授業は伝統的な文法・訳読中心の教師主導型学習になっている。自分の考えを英語で表現する能力と積極的にコミュニケーションを図る態度を育成することが、到達目標として掲げられていても(文部省1989)、現実には、学生自身が英語を使ってコミュニケーションを体験する時間は十分でない場合が多いだろう。訳読中心の学習は、語彙と読解力を強化するために有効だろうが、それだけではコミュニケーション能力は育たないということが言われて久しい。文法・訳読の学習とコミュニケーション体験は、外国語学習という車の両輪のようなもので、どちらも不可欠だと思う。

このような背景を持って入学してくる1年生全員に、英語の基礎的コミュニケーション能力の育成を目指す「英語コミュニケーション1～4」が用意されている。学生数は各クラス約30人で、リスニングテストの得点により到達度別のクラスが編成される。これらの科目は、英語の4技能における運用能力獲得を目標とした総合英語と呼べるものである。リスニング、スピーキング、ライティング、リーディングのすべてにおいて、意思の疎通をはかるための能力を総合的に育成していく。授業はネイティブの教師によって行われ、コミュニケーション体験を通して言語運用能力の養成を目指す「コミュニカティブ・アプローチ」(Richards and Rodgers 1986)が中心になっているといえるだろう。言語教育の主流となっているこの教授法は、“interactive” “communicative” “student-centered”そして“task-based”などのキーワードで説明されている。

言語習得には、理解可能な言語の多量のインプットとインターアクション(相互作用)が必要であり、また不安、緊張が少ないことが重要だと言われている(Krashen 1987)。1年次の英語授業は、この3つの条件に関して望ましい学習環境であると思われる。授業の一般的な特徴を以下のように整理することができるだろう：

- 1) ネイティブの教師によって行われるため、英語のインプットが多量に与えられる。
- 2) コミュニケーション活動中心の授業である。学生が興味を持つと思われるようなテーマで、英語によるコミュニケーションを体験させていく。学習する側が、受け身でなく主体的に参加することを求められる、学習者主導型の授業である。
- 3) コミュニケーション活動における第一の到達目標は、英語を話すことに対する抵抗をなくすことに置かれていると言えるだろう。そのため、文法的な間違いを恐れずに英語を使うことが何より重視される。英語で意思の伝達に成功した時の達成感は、学習者に動機づけを与え、学習意欲を高めるだろう。
- 4) 授業活動におけるもう一つの目標は、英語を聞くことに対する抵抗をなくすことだと言えるだろう。そのため、一語一句分からなくても大意をつかみコミュニケーションを続けることが重視される。個々の単語を日本語に訳しては、コミュニケーションが中断されてしまうため、訳読で身についたこの習慣から離れなければならない。
- 5) 不安、緊張が少ない状況での言葉のやりとりを通して、インタラクションを増やすことができるように、グループワークやペアワークが多く取り入れられている。
- 6) ネイティブの教師による授業そのものが、学生にとっては異文化体験となる。言語の背景にある文化についても学ぶことになる。
- 7) 学生数は各クラス30人で、到達度別クラスが編成されている。
- 8) 全クラス共通のテキストを使うが、授業活動、進度、試験、評価は担当教員の自由裁量で行われているため、クラスの状況に応じた柔軟な授業運営がなされる。

では、その約半数が英語嫌いだったと思われる194人の学生達は、1年次英語学習をどう受けとめていたのだろうか。訳読中心の「教師主導型の授業に慣れきった日本の学生がいきなり学生主導型の授業に移行して翻弄され、混乱する危険」(中村 1993)がある中で、どう対応したのだろうか。設問Ⅱは、1年間の学習に対する感想を問うものである(表2)。

設問Ⅱ. 1年次の英語授業「英語コミュニケーション1-4」の難易度はどうでしたか。(表2)

	全 体	グループ1	グループ2	グループ3
a) 易しすぎた	18 (9.39%)	5	9	4
b) 丁度良かった	147 (75.8%)	29	54	64
c) 難しすぎた	24 (12.4%)	2	1	21
無回答	5 (2.6%)	0	1	4
計	194	36	65	93

設問 特にどのような点で。

a) 易しすぎた

- ・テキストの内容が易しすぎた。中学生レベルの事ばかりだった。
- ・単語が易しすぎた。
- ・ゲームみたいな授業ばかりだった。
- ・進度が遅すぎた。
- ・先生と直接話すことを要求されなかった。
- ・結局、日本語で話してしまった、など。

b) 丁度良かった

- ・初めての経験だったが、外国人の発音にある程度慣れた。
- ・クラス分けで同レベルの人達だったので良かった。
- ・ネイティブの先生で、日常会話をリラックスした雰囲気勉強できた。
- ・ネイティブの先生と楽しく話せた。
- ・文法にとらわれない雰囲気が良かった。
- ・内容が日常生活に関する事で良かった。
- ・先生が分かりやすく、はっきりと話してくれた。話すスピードも良かった。
- ・分かりにくい単語は、別のことばで言い換えてくれた。
- ・先生が使う日本語やジェスチャーで、理解が助けられた。
- ・注意深く聞くことで、完全にではなくても、先生の言葉が理解できた。
- ・授業がゲーム感覚で楽しく、勉強しているという感じがなかった。
- ・音楽を使った授業が印象的だった。
- ・過度の宿題もなく、先生が授業のスピードを学生に合わせてくれた。
- ・教材が丁度良かった。
- ・ライティングもリーディングも丁度良かった。
- ・全てのやりとりが英語で行われた。
- ・繰り返しやることで身についた。
- ・文法などは、中学レベルだったから。
- ・分からない単語が少なかった。基本単語を思い出せた。
- ・高校で学んだことの繰り返しだった、など。

c) 難しすぎた。

- ・先生の話が速くて聞き取りにくかった。
- ・文法のテストが難しかった。
- ・やっていることの趣旨が分からなかった。
- ・高校での自分の勉強が足りなかったため。
- ・受験英語しか知らないで、コミュニケーションが取れなかった。
- ・語力がないので、レポートが大変だった、など。

表2で注目すべきことは、約76%の学生が、1年次の英語学習に対して「ちょうど良かった」と肯定的な評価を出していることである。学生の多くがネイティブの教師によるコミュニケーション実践の授業内容に満足し、それなりに動機づけを与えられていたと思われる。学生のコメントから、到達度別のクラス分けも学生の満足度を高める一因になっていたことがうかがえる。「易しすぎた」「難しすぎた」という否定的な意見は約22%であった。では、何が授業に対する高い満足度をもたらしたのだろうか。コメントに明らかにされているように、先に挙げたこれらの授業の特徴がそのまま高い満足度をもたらしたと思われる。

実際の学習成果はどうであったのか。1年間の学習の成果を、4技能面から(表3～6)、語彙の面から(表7)、異文化理解の面から(表8)、そしてコミュニケーション活動における目標の達成具合から(表9-11)、自己評価してもらった。

設問Ⅲ. 1年次英語学習におけるあなた自身の成果を評価してください。

「リスニング能力について」

(表3)

	全 体	グループ1	グループ2	グループ3
a) 非常に進歩した	0 ( 0%)	0	0	0
b) まあまあ進歩した	41 (21.1%)	13	14	14
c) 少し進歩した	101 (52.1%)	16	39	46
d) 進歩がなかった	50 (25.8%)	7	12	31
無回答	2 ( 1.0%)	0	0	2
計	194	36	65	93

「スピーキング能力について」

(表4)

	全 体	グループ1	グループ2	グループ3
a) 非常に進歩した	1 ( 0.5%)	1	0	0
b) まあまあ進歩した	14 ( 7.2%)	5	3	6
c) 少し進歩した	76 (39.2%)	19	32	25
d) 進歩がなかった	102 (52.6%)	11	30	61
無回答	1 ( 0.5%)	0	0	1
計	194	36	65	93

「リーディング能力について」

(表5)

	全 体	グループ1	グループ2	グループ3
a) 非常に進歩した	0 ( 0%)	0	0	0
b) まあまあ進歩した	28 (14.4%)	13	8	7
c) 少し進歩した	84 (43.3%)	9	36	39
d) 進歩がなかった	81 (41.8%)	14	21	46
無回答	1 ( 0.5%)	0	0	1
計	194	36	65	93

「ライティング能力について」

(表6)

	全 体	グループ1	グループ2	グループ3
a) 非常に進歩した	1 ( 0.5%)	1	0	0
b) まあまあ進歩した	27 (13.9%)	9	11	7
c) 少し進歩した	79 (40.7%)	14	30	35
d) 進歩がなかった	85 (43.8%)	12	24	49
無回答	2 ( 1.0%)	0	0	2
計	194	36	65	93

「語いについて」

(表7)

	全 体	グループ1	グループ2	グループ3
a) 非常に増えた	1 ( 0.5%)	1	0	0
b) まあまあ増えた	7 ( 3.6%)	3	3	1
c) 少し増えた	68 (35.1%)	13	28	27
d) 進歩がなかった	115 (59.3%)	19	34	62
無回答	3 ( 1.5%)	0	0	3
計	194	36	65	93

実際の英語コミュニケーション能力の向上に関しては、授業に対する満足度のような高い評価は得られていないことが分かる(表3～6)。学習成果を技能別に見ると、リスニング能力における自己評価が最も高く、スピーキング能力では最も低くなっている。言語の習得からアウトプットに至るまでには、さらに時間が必要だと言われる(Krashen and Terrell 1983)

ことから考えて、この結果は妥当だと思われる。程度の差はあるがそれなりに「進歩した」という者の合計は以下のようにになっている：

リスニング能力においてそれなりの進歩があったという者	約73%
リーディング能力においてそれなりの進歩があったという者	約58%
ライティング能力においてそれなりの進歩があったという者	約55%
スピーキング能力においてそれなりの進歩があったという者	約47%

「進歩がなかった」という否定的な評価を出しているのは、スピーキング能力では約53%、リーディング能力とライティング能力ではそれぞれ約42%と44%、そしてリスニング能力においては約26%の者である。その要因は何であろうか。75%の学生が授業そのものに高い満足度を示していた（表2）ことから考えて、それなりの動機づけを与えられていた筈である。それでも進歩を実感できなかったのは、学習時間の不足、クラスサイズが大きすぎるなどの学習環境におけるマイナス要因、および基礎英語力の不足などの個人要因が考えられる。また、アウトプットには、さらに多くの学習時間が必要だろう。学習環境のマイナス要因をできるだけ取り除くよう状況を改善しなければならない。

語いに関しては、59%の学生が「進歩がなかった」という否定的な答えを出している。日常のコミュニケーションでは中学レベルの語いで足りるということがよく言われることから考え、この結果は当然かもしれない。むしろ受験勉強をしていた頃より語彙が少なくなったと感じる者がいても不思議ではない。基礎的コミュニケーション能力育成を目指す学習では、語彙の補強が必要だということが表7から指摘できるだろう。専門知識を身につけていくためにはレベルの高い語彙を増やし、読解力を強化していかなければならない。そのための手当を早急に考えなければならないと思う。

「異文化に対する理解について」 (表8)

	全 体	グループ1	グループ2	グループ3
a) 非常に深まった	15 ( 7.7%)	7	5	3
b) まあまあ深まった	61 (31.4%)	9	26	26
c) 少し深まった	89 (45.9%)	15	30	44
d) 進歩がなかった	28 (14.4%)	5	4	19
無回答	1 ( 0.5%)	0	0	1
計	194	36	65	93

表8から、85%の学生が程度の差はあるが異文化に対する理解が深まったと評価していることが分かる。ネイティブの教師による授業そのものが、学生にとっては異文化体験である。言

語能力はコミュニケーション能力の一部であり、それが全部ではないと言われているが (Allwright 1979)、ネイティブの教師による授業において、学生たちは英語コミュニケーションの言語面だけでなく、非言語的な部分についても多くを学んだと思われる。英語の背景にある文化について認識を高めるといふ点において、ネイティブの教師による授業は有効であったと言える。また、文化に関する背景知識は、リーディングにおいてもリスニングにおいても的確な推測を可能にし、理解を促してくれると言われる (天満1989)。授業における学生の異文化体験は、コミュニケーション能力の向上に深くかかわってきたと思われる。

先に述べたように、コミュニケーション活動においては、まず間違いを恐れずに英語を使っていくこと、そして一語一句分からなくても大体の意味をつかみコミュニケーションを実践していくことが重視されている。自分の意思が通じた時には、英語でコミュニケーションを行うことの面白さを実感できるだろう。次の3つの設問は、1年間の学習でこれらの目標をどの程度達成できたかを問うものである。(表9～11)。

「間違いをあまり気にせずに英語を口に出すことが出来るようになったか。」 (表9)

	全 体	グループ1	グループ2	グループ3
a) はい、非常に	7 (3.6%)	4	1	2
b) はい、まあまあ	31 (16.0%)	8	12	11
c) はい、少し	74 (38.1%)	16	24	34
d) いいえ、だめだった	82 (42.3%)	8	28	46
無回答		0	0	0
計	194	36	65	93

「英語を使ってコミュニケーションを行う面白さを実感できたか。」 (表10)

	全 体	グループ1	グループ2	グループ3
a) 十分にできた	12 (6.2%)	7	3	2
b) まあまあ出来た	34 (17.5%)	15	11	8
c) 少し出来た	85 (43.8%)	9	38	38
d) 出来なかった	60 (30.9%)	5	13	42
無回答	3	0	0	3
計	194	36	65	93



「一語一句分からなくても、相手の言うことが大体理解できるようになったか。」 (表11)

	全 体	グループ1	グループ2	グループ3
a) はい、十分に	12 ( 6.2%)	6	3	3
b) はい、まあまあ	68 (35.1%)	18	25	25
c) はい、少し	90 (46.4%)	11	34	45
d) いいえ、ならなかった	22 (11.3%)	1	3	18
無回答	2 ( 1.0%)	0	0	2
計	194	36	65	93

外国語の習得には心的要因が深くかかわっている。高い動機づけがあり緊張、不安が少ないと、言語の習得が促されると言われている (Krashen 1987)。試験勉強の時のように文法的正確さが要求され間違いが許されないような言語環境では、不安と緊張が高まり、言語習得は起こりにくい。特にコミュニケーション能力は育ちにくいということを、学生達自身も経験済みだろう。1年次の英語学習において、学生は受験勉強の後遺症を取り除き、間違いを恐れずに英語を口に出し、コミュニケーションを体験していくことが期待されている。実際のコミュニケーションでは、訂正、言い換えなど色々な方法でやり直しが許されることを認識しなければならないだろう。

表9から、約58%の学生は英語を口にするに程度の差はあるがそれなりに慣れてきたが、残りの約42%はまだ困難を感じていることが分かる。約68%の学生が、英語で意思が通じた時の達成感を体験していると思われる。その経験こそ、学生に自信と動機づけを与えるものである。

また、現実のコミュニケーションでは、一語一句分からなくても文脈から意味を推測できるということを、学生たちは認識してきただろう。リスニングにおいてもリーディングにおいても、個々の単語に日本語を介入させる習慣は、コミュニケーション能力を身につけようとする時には妨げとなる。英語で行われる授業によって、この習慣を取り除いていくことができる筈である。約88%の学生が、程度の差はあるが、一語一句わからなくても意味を取れるようになってきたと答えている。これは、彼らが文脈から意味を推測する能力を身につけてきたことを意味している。

コミュニケーション能力育成という本学部英語教育の目標は、この1年間でどの程度達成されたと言えるだろうか。1年次英語学習の総合的な成果を考える時、以下の数字に再び注目したい。それらは、程度の差はあっても肯定的な評価を出している者の合計である：

一語一句分からなくても、大体の意味が取れるようになったと言う者	約88%
異文化理解がそれなりに深まったと言う者	約85%
リスニング能力がそれなりに向上したと言う者	約73%
英語を使ってコミュニケーションを行う面白さを実感できたと言う者	約68%
間違いを気にせずに英語を口に出すことが出来るようになったと言う者	約58%
リーディング能力がそれなりに向上したと言う者	約58%
ライティング能力がそれなりに向上したと言う者	約55%
スピーキング能力がそれなりに向上したと言う者	約47%
語彙がそれなりに増えたと言う者	約39%

これらの結果を総合して1年間の学習成果として指摘できることは、授業において、約7、8割の者が英語を聞いて大体の意味が分かるようになってきたということである。英語を話すことに対する抵抗はまだ大きいようだが、約半数は話すことにもそれなりに慣れてきて、英語でコミュニケーションを図るようになってきたと言えるだろう。また、ネイティブの教師による授業において、学生は英語コミュニケーションの非言語的な面をはじめとする、言語の背景にある文化についても多くを学んだと思われる。

この学習成果が客観的にどの程度のものであるかを知るために、今後何らかの英語能力測定試験を利用することができるだろう。それによって学生の能力を把握し、大学英语教育の実態調査（小池 1983）の資料などと共に、カリキュラム内容を考える上で参考にできると思われる。コミュニケーション能力の明確な目標を設定し、学生の動機づけを高めることが期待できるかもしれない。

## 2. 2 本学部英語教育に対する学生の意識について

アンケート後半の以下の3つの設問は、学生の学習意欲、学習目的、および本学部における英語教育に対する要望、関心などを問うものである。

設問Ⅳ. あなたの英語学習への取り組みは次のどれですか。

- |                                       |                |
|---------------------------------------|----------------|
| 1 予習、復習、宿題などがハードでも、しっかり勉強して英語能力を高めたい。 | 37/194 (19.1%) |
| 2 良い成績を取りたいので、ある程度の努力はする。             | 73/194 (37.6%) |
| 3 それほど努力しなくても、単位が取れば良い。               | 32/194 (16.5%) |
| 4 もし出席を取らないなら、おそらく授業には出ないだろう。         | 10/194 (5.2%)  |
| 5 英語学習は好きじゃないので、出来るなら勉強したくない。         | 20/194 (10.3%) |

## 6 その他

22/194 (11.3%)

- ・ 成績に関係なく、楽しい学習であれば頑張る。
- ・ ある程度の努力はするが宿題の多いのは困る。英語だけやるわけにいかない。
- ・ 資格を取りたい。
- ・ 好奇心をかきたてる授業ならば、おそらく欠席せずにいられると思うが。
- ・ 英語は苦手だか、話せるようになりたいので、出来る限り頑張りたい。
- ・ 英語能力を高めたいが、授業についていけるか不安だ。
- ・ 英米文化を勉強したい。
- ・ 成績のためでなく、自分の将来のために。
- ・ 実際に使える英語を身につけたい。
- ・ 外国人とコミュニケーションが取れるようになりたいので、ある程度は努力する。
- ・ 英語は苦手だが、必要なのでなんとかしたいが、勉強の方法が分からない。
- ・ 楽しい雰囲気での会話はいいが、英検等の面接時に困っている、など。

本学部での1年間の英語学習を終えたこの時点で、上記の設問Ⅳで「1」、「2」、または「その他」を選んだ計約68%の者が、英語能力の獲得に対してそれなりの意欲を見せ、努力をすると答えている。まったく意欲がないように思われるのは、約16%の学生である。設問Ⅰに対して、約48%の学生が、高校では英語が「嫌いだった」と答えていたこと(表1)を考え合わせると、1年次英語学習は学生に動機づけを与える上で有効だったということが言えるだろう。基礎レベルのコミュニケーション実践活動は、文法・訳読中心の学習と異なり、「ゲーム感覚で」楽しめたのであろう。

設問Ⅴ. 大学の英語授業活動として、どのようなものに興味がありますか。(この授業だけでなく大学の英語教育全般を考える)(複数回答可)

1	映画・フィルムによる英語学習	145/194 (74.7%)
2	音楽を通しての英語学習	111/194 (57.2%)
3	ネイティブ・スピーカーとの会話	100/194 (51.5%)
4	時事問題などについての英語ディスカッション	18/194 (9.3%)
5	英字新聞の記事を読む	31/194 (16.0%)
6	やさしい読み物を多量に読む	57/194 (29.4%)
7	英文の手紙などをふくむライティング	47/194 (24.2%)
8	英語のスピーチ	14/194 (7.2%)
9	国内、国外の様々な問題について各自テーマを決め、調べ、英語で発表する	5/194 (2.6%)

10 国内、国外の様々な問題について各自テーマを決め、調べ、英文レポートを書く	18/194 ( 9.3%)
11 英語資格試験のための準備学習	55/194 (28.4%)
12 英語文献などの長文講読	8/194 ( 4.1%)
13 その他 (具体的に)	5/194 ( 2.6%)
・ 海外留学、海外研修、ディベート活動、など	

設問Ⅵ. あなたの英語学習の目的は何ですか。(複数回答可)

1 英語圏への留学	15/194 ( 7.7%)
2 英語の資格試験	63/194 (32.5%)
3 公務員試験	10/194 ( 5.2%)
4 教員試験	5/194 ( 2.6%)
5 入社試験	33/194 (17.0%)
6 卒業後英語を使った仕事がしたい	27/194 (13.9%)
7 映画などの台詞を理解したい	64/194 (33.0%)
8 海外旅行または短期留学をしたい	69/194 (35.6%)
9 日常生活で必要な時に英語で話を通じるような会話力をつけたい	116/194 (59.8%)
10 必修単位を取得するだけのため、それ以上に興味はない	32/194 (16.5%)
11 その他 (無回答を含む)	5/194 ( 2.6%)
・ 大学院入試およびゼミでの原書講読	
・ 外国の友人を訪ねたい	

設問Ⅴ, Ⅵの回答に見られるように、多くの学生が望んでいるのは、基礎レベルのコミュニケーション能力の獲得であり、約60%の学生は、日常生活で必要な会話力をつけることが学習の目的だと考えている。大学英語教育の内容としてふさわしいと思われる文献講読、レポートや口頭発表で仕上げるプロジェクト、時事問題の討論等を支持する学生は少ない。学生の要望、ニーズに応えられるように授業内容を充実させることが大切である。同時に、学生の希望する基礎的コミュニケーション能力の育成に留まることなく、大学英語教育に適した内容を提供し、それに興味を持つ学生を増やしていかなければならないと思う。

では、何が大学英語教育にふさわしい内容なのか。しかも実際に役立つ運用能力を養い、かつ本学部学生の英語能力及び学習意欲に適していて、授業として成立可能でなければならないし、専門知識を得るために必要な英語能力を養成するものでなければならない。これらの条件を満たすようなカリキュラム内容を考えていかなければならないだろう。アンケート結果にみられる学生の要望、関心は参考になると思われる。

## 2. 3 結論

今回の調査で明らかになった点、および今後の検討課題と思われる点を、以下のように要約できるだろう：

- 1) 1年次授業の難易度を問われ、約76%の者が「ちょうど良かった」と評価し、ネイティブの教師によるコミュニケーション実践授業に対してかなり高い満足度を示していた。英語学習に対して動機づけを与えられた学生が多いのではないだろうか。
- 2) 1年次を終えた時点で、回答者の約68%が英語学習に対してそれなりの意欲をみせ、努力をすると答えている。意欲がまったく無いと思われるのは、約16%である。学生の約48%が高校で英語嫌いであったと答えていたことから、1年次の英語学習は、動機づけを与えるという点において有効であったということが、ここでも確認できる。
- 3) コミュニケーション能力の向上に関しては、授業に対する満足度ほど高い自己評価は得られていない。学習成果を技能別に見ると、リスニング能力において評価が最も高く（リスニング能力がそれなりに向上したと答えた者が約73%）、リーディング能力、ライティング能力、スピーキング能力の順に低くなっている。いずれの技能においても、進歩が感じられなかったという者には、個人的要因のほか、時間、クラスサイズなどにおけるマイナス要因が考えられる。可能な限りそれらを改善する必要がある。
- 4) 学生の約59%が、語彙に関して「進歩がなかった」と答えている。基礎レベルのコミュニケーション活動だけでは、十分な語彙が養われれないと言えるだろう。専門知識を身につけていくためには、レベルの高い語彙を増やし、読解力を強化する必要がある。1年次からその面での補強が必要であり、そのための科目設定も必要だと思われる。
- 5) 85%の学生が、程度の差はあるがそれなりに異文化に対する理解が深まったと答えている。英語の背景にあるものについて学ぶことにより、総合的コミュニケーション能力の獲得をいくらかでも促されてきたのではないかとと思われる。
- 6) コミュニケーション活動における目標は、どの程度達成されただろうか。約58%の学生が、程度の差はあるが間違いを恐れずに英語を口に出せるようになったと答え、約68%がコミュニケーションを行う面白さを実感したと言う。程度の差はあるが、相手の言うことが大体理解できるようになってきたと言う者は、約88%である。
- 7) 上述の3)～6)により、1年次英語学習の成果として確かなことは、授業において多くの学生が英語を聞いて大体の意味を取れるようになったということだと言える。英語を話すことにおいては、まだ抵抗があるようだが、約半数の者は話すことにもそれなりに慣れてきたと言えるだろう。
- 8) 1年次英語学習で獲得されたコミュニケーション能力とは、どの程度のものなのか。また現在のカリキュラムでどの程度の能力を目指すことができるのか。今後何らかの客観的能力測定試験などを利用することで、学生の能力を把握し、明確な目標設定も可能になるだ

- ろう。学生は各自の能力を知り、学習意欲を高められることが期待できるかもしれない。
- 9) 多くの学生が望んでいるのは、基礎的なコミュニケーション能力の獲得である。学生の要望に応えると同時に、そこに留まることなく、大学教育にふさわしい内容で、英語運用能力をさらに高めることができるようなカリキュラムを提供し、興味を持つ学生を増やしていかなければならないだろう。

### 3. おわりに

今回の調査対象は「英語コミュニケーション5」を履修中の学生194人で、2年生全体の約61%だった。しかし、本学部英語カリキュラムの基礎となっている1年次英語教育の現状および英語教育に対する学生の意識について、おおよその全体像が明らかになったと思われる。学生の多くがその学習内容に満足し、それなりの意欲をみせていることから、ネイティブの教師による1年次英語教育は、動機づけを与えるという点において有効であったと言えることができるだろう。

コミュニケーション能力については、授業において多くの学生が英語を聞いて理解できるようになったということが確かな成果であろう。英語コミュニケーション能力のさらなる向上を望む学生の意欲に応えると同時に、大学英語教育にふさわしい、より充実したカリキュラム内容を提供できるよう検討していかなければならない。さらに多くの学生を対象にして、今回と同様の意識調査を実施することも必要だと思う。その結果を参考にして、本学部英語教育の目的をより明確なものにしていくことができるだろう。

#### 参考文献

- Allwright, R. 1979. "Language Learning Through Communication Practice", Brumfit, C. J. and Johnson, K. (eds.), *The Communicative Approach to Language Teaching*. London: Oxford University Press.
- 大学「一般英語」教育実態調査研究会(代表 小池生夫) 1985. 『大学英語教育に関する実態と将来像の総合的研究』東京
- Krashen, S. D. 1987. *Principles and Practice in Second Language Acquisition*. Exeter: Prentice-Hall International (UK).
- Krashen, S. D. and Terrell, T. D. 1983. *The Natural Approach: Language Acquisition in the Classroom*. New York: Pergamon
- 文部省. 1989. 『高等学校学習指導要領』 東京: 文部省
- 中村, ジューン. 1993. 「学生主導型クラスを可能にするPREASSESSMENTとEVALUATIONの方法」, 『発信型英語教育の実践』 東京: 三修社
- Richards, Jack C. and Rodgers, Theodore S. 1986. *Approaches and Methods in Language Teaching*. Cambridge University Press.
- 天満美智子. 1989. 『英文読解のストラテジー』 東京: 大修館書店

(資料)

1997. 4.

## 英語学習に関するアンケート

I. 高校時代、あなたは英語学習が好きでしたか。

- a) 好きだった b) まあまあだった c) きらいだった

II. 1年次の英語授業「英語コミュニケーション1～4」の難易度はどうでしたか。

- a) 易しすぎた b) 丁度良かった c) 難しすぎた

特にどのような点で ( )

III. 1年次英語学習におけるあなた自身の成果を評価してください。

リスニング能力：

- a) 非常に進歩した b) まあまあ進歩した c) 少し進歩した d) 進歩がなかった

スピーキング能力：

- a) 非常に進歩した b) まあまあ進歩した c) 少し進歩した d) 進歩がなかった

リーディング能力：

- a) 非常に進歩した b) まあまあ進歩した c) 少し進歩した d) 進歩がなかった

ライティング能力：

- a) 非常に進歩した b) まあまあ進歩した c) 少し進歩した d) 進歩がなかった

語い：

- a) 非常に増えた b) まあまあ増えた c) 少し増えた d) 進歩がなかった

異文化に対する理解：

- a) 非常に深まった b) まあまあ深まった c) 少し深まった d) 進歩がなかった

間違いをあまり気にせず英語を口に出すことが出来るようになったか：

- a) はい、非常に b) はい、まあまあ c) はい、少し d) いいえ、だめだった

英語を使ってコミュニケーションを行う面白さを実感できたか：

- a) 十分に出来た b) まあまあ出来た c) 少し出来た d) 出来なかった

一語一句分からなくても、相手の言うことが大体理解できるようになったか：

- a) はい、十分に b) はい、まあまあ c) はい、少し d) ならなかった

その他 ( )

IV. あなたの英語学習への取り組みは次のどれですか。

- 1 予習、復習、宿題などがハードでも、しっかり勉強して英語能力を高めたい
- 2 良い成績を取りたいのである程度の努力はする
- 3それほど努力しなくても、単位が取れば良い
- 4 もし出席を取らないなら、おそらく授業には出ないだろう
- 5 英語学習は好きじゃないので、出来るなら勉強したくない

6 その他 ( )

V. 大学の英語授業活動として、どのようなものに興味がありますか。(この授業だけでなく大学の英語教育全般を考える) (複数回答可)

- 1 映画・フィルムによる英語学習
- 2 音楽を通しての英語学習
- 3 ネイティブ・スピーカーとの会話
- 4 時事問題などについての英語ディスカッション
- 5 英字新聞の記事を読む
- 6 やさしい読み物などをふくむライティング
- 8 英語のスピーチ
- 9 国内、国外の様々な問題について各自テーマを決め、調べ、英語で発表する
- 10 国内、国外の様々な問題について各自テーマを決め、調べ、英文でレポートを書く
- 11 英語資格試験のための準備学習
- 12 英語文献などの長文講読
- 13 その他 (具体的に )

VI. あなたの英語学習の目的は何ですか。(複数回答可)

- 1 英語圏への留学
- 2 英語の資格試験
- 3 公務員試験
- 4 教員試験
- 5 入社試験
- 6 卒業後英語を使った仕事がしたい
- 7 映画などの台詞を理解したい
- 8 海外旅行または短期留学
- 9 日常生活で必要な時に英語で話を通じるような会話力をつけたい
- 10 必修単位を取得するだけのため、それ以上の興味はない
- 11 その他 ( )